

The Sunday School Penny Magazineより “Hand and Heart”, “Bessy’s Troubles at Home”について・・・

多比羅 眞理子

『手と心』“Hand and Heart”そして『ベッシーの家庭での悩み』“Bessy’s Troubles at Home” (1853) は、ギヤスケル夫人が *Mary Barton* でデビューした直後の1849年、1852年に *The Sunday School Penny Magazine* に掲載された短編である。この掲載した雑誌の性格からみて、両作品のテーマは大変似たものとなり、切り離すことが出来ないように思える。従って、本論では、両作品の統一されたテーマと、また、そこに現われたギヤスケル夫人の世界とを探ってゆきたい。

(i)

両作品が掲載された *The Sunday School Penny Magazine* は、ギヤスケル一家と親しく、同じユニタリアン派の牧師のトラバース・マッジエ(Travers Madge)が日曜学校の生徒達を対象に編集した雑誌といわれている。彼はまた、地域の恵まれない人々に対する働きでも、当時よく知られた牧師でもあった。その彼の要望に応じて書かれたのが両作品で、ギヤスケル夫人の名は明記されずに掲載されている。

ギヤスケル夫人は友人のモーリス (F.D. Maurice) に宛た手紙のなかで、前者の作品が気に入っており、彼も同様に気に入ることを希望していると述べている¹⁾。

それぞれの物語のあらすじは次のようである。

1849年9月に発表された“Hand and Heart”は父を早くに亡くし、聡明で、慈悲ぶかい母親をも亡くした9歳の少年トム・フレッチャーはマンチェスターの叔父一家に引き取られるが、母親譲りの素直で汚れを知らない姿に接するにつれ粗野で祈ることを忘れていた叔父を始めとし、常に怒りっぱかった叔

母も人としての慈しみを取り戻す。そして従兄弟達は彼から真の勇気の意味を学ぶ。一方、愛情深かった母を失い孤独に打ちひしがれていたトムも、1才半の従姉妹のメアリーを通して再び人を慈しむ感情を取り戻し、生きる意義と希望とを見いだした。

“Bessy’s Troubles at Home”は1852年1月に掲載されたもので、前作同様に父親を亡くし、心臓を病んだ母親が施療院へ行っている間の、留守を任された15歳の長女・ベッシーの自己中心的な発想と行動が家族に引き起こした混乱と、妹メアリーの大火傷という事件の顛末とを描きだした。

(ii)

両作品の構成上の共通点は、まず主人公達が父親を早くに亡くし、貧しいけれど母親の深い愛情のもとで日々を送っていることである。

エドガー・ライト教授(Edgar. Wright)がギヤスケル夫人の小説のパターンは

「独りっこ、片親または孤児が多く、たとえ両親が揃っていても物語の途中で片親になるパターンが多い。」²⁾

と述べるように、これらの主人公達もこのパターンの類に外れていない。

これは生後13ヶ月で母親を亡くし、父親の再婚、ナッツフォードの叔母に引き取られ少女・娘時代を送るというギヤスケル夫人自身の生立ちと、実兄の失踪、行方不明事件と夫人の愛息を10ヶ月でしょう高熱から亡くすという彼女を襲った不幸な体験とが作品の中に強く投影された結果であろう。母の死後、(人の)叔母のもとでの静かで、愛情溢れた日々、また結婚後の幸せな日々を送るにつれ、最愛の人々を失うという体験は、夫人の心奥底に大きな喪失感となって、沈んでいたに違いない。その結果、満足な形態の家庭でこそ与えることの出来るはずの安定感や愛情が欠けている状態、または満足な家庭の形態や安定感、愛情が危機に瀕している状態を小説のテーマとして選ぶことになった。

事実、これら二つの作品のみならず、彼女の後の多くの作品は同様に、満足な家庭の形態を持つものは少ないのである。

「とりわけ、初期の作品は彼女の個人的体験に基づいて書かれている。」³⁾

とライト教授が述べるように、両作品は、作家としデビューした直後のものであり、ギヤスケル夫人自身の経験が作品の中に強く投影されたとしても不思議はない。

“Hand and Heart”のトムは家庭の形態は不十分ながらもフレッチャー夫人

から十分な愛情が注がれ、最も安定した状態のもとで養育された子供として登場し、一方、マンチェスターの叔父一家は家族に欠けるものがない満足な状態にもかかわらず、人間的な愛情と安定感に欠けた存在としてトムとは対照的に描かれる。そして“Bessy’s Troubles at Home”の場合はトム同様に、片親にもかかわらず主人公兄妹達には母親の愛情が十分満ち溢れている。このような状態のもとでこそ子供たちの人間として望むべき成長が成されると信ずるギヤスケル夫人は、様々な家庭環境や背景を背負って集う日曜学校の生徒達に家族構成という外的要因に決して左右される事無く、自分達の心の有り様や、愛情という内的のもの大切さを、日常の中に常に起こりうる事件を通して教えようとした。

(iii)

次に両作品を通して、ギヤスケル夫人は「自分達の置かれた立場をよく理解することの必要性和、同時に自分達に課せられた義務の遂行の重要性」とを伝える。

“Hand and Heart”ではトムの

“Mother, I should so like have great deal of money.”⁴⁾

(お母さん、僕とっても沢山、お金が欲しいんだ。)

という素朴な願望に対して、フレッチャー夫人はトムの発言の理由を尋ねながらも、まず母親であるという自分の務めを果たすこのほうが、お金のために働くことより大事であると語る。

“Now, do you think I should be doing my duty if I left you in the evenings, when you come home from school, to go out as a waiter at ladies’ parties?

I could earn a good deal of money by it, and I could spend it well among those who are poorer than I am . . . but then I should be leaving you alone in the little time that we have to be together ; I do not think I should be doing right even for our ‘good and wise purpose’ to earn money . . . ”⁵⁾

(あなたが学校から帰る夕方に、私が奥様達のパーティに給仕人として出掛け、あなたを家において私の義務を果たせると思

う？ そうすれば沢山のお金は貰えるでしょう。そして、私達より貧しい人達の中では、ずっとお金を使えるでしょう。でも、それでは、私達が一緒にいるべきほんのわずかな時間もあなたを、独りぼっちにしなければならないでしょう。たとえ、お金を得る「良く、賢い理由」のためでも私はするべきではないと思うのよ。)

一方、“Bessy’s Troubels at Home”ではこのフレッチャー夫人の考えを更に進め、自分に課せられた義務をないがしろにしたベッシーを引き合いに出すことによって、たとえ、目的が良く、賢明なもの (good and wise purpose) であってもその人の立場や義務を忘れることの危険性と罪を伝える。

目的がいかにかに正しいものであってもお金を得ようとするあまり、己に課せられた義務を忘れたベッシーに、メアリーを診た医者も人生の長として彼女を諭す。

“Earning money wouldn’t make us happy. . . . Didn’t your mother leave you in charge of all at home?”

“I’ll tell you what ; never you neglect the work clearly laid out for you by either God or man ; to go making work for yourself, according to your own fancies. God knows what you are most fit for. Do that.”⁶⁾

(お金を稼ぐことは私達を幸せにはしないよ。お母さんは家のすべてをきみに任せただけではなかったのかね？

わしがきみに教えよう。自分自身の思い付きで、自分のために働きに行く為に神様や人から明らかに任された仕事を決してないがしろにしてはならない。神様はきみが何に一番適しているのかを知っておられる。それをしなさい。)

「人に授け、与えられた義務を果たすことの重要性」を説くギヤスケル夫人の姿勢は、両作品に先立って、1847年に書かれた短編「リビー・マーシュの三つの時期“Three Eras of Libbie Marsh”の中でも孤児のリビーに語らせている。

“I know . . . God has seen fit to keep me out o’ woman’s natural work, I should try and find work for myself. . . . and as

old maids, just looking round for the odd jobs God leaves in the world for such as old maids to do, there's plenty of such work, — and there's the blessing of God on them as does it.”⁷⁾

(神は女の人に生まれながらにある仕事に私をふさわしくないと御覧になっているから、私は自分のために、仕事を見つけなければならないの。

・・・そして、オールドミスがするように神がこの世に残しておいた人目に付かない仕事を探し求めている人のようにね。でもその様な仕事は沢山あって、それをする者に神の祝福があるの。)

そして、「自分に課せられた義務を果たした後は、神の御手に全てを委ねる」というキリスト教の精神が更にこれらの作品を強く支えている。

フレッチャー夫人は自分の死を悟ったとき、リー夫人がサウスポートの治療院行きを決めたとき、彼女達は共に全てを神の御手に委ねた。

“I must leave it in God's hands. He raiseth up and He bringeth low.”⁸⁾

(生きるも死ぬも全て全能の神様の意思のままです。山脇百合子訳)

医者がベッシーを諭すときも

“God knows you are most fit for. Do that. And then wait ; if you don't see next duty clearly. You will not long idle in this world, if you are ready for summons.”⁹⁾

(神様はきみが最も適しているものをご存じます。それをしなさい。もし次の務めがはっきりと分からない時は待ちなさい。もし、きみにお召しの用意が出来ているのなら、この世をずっとのらくらすることはないよ)

両作品が日曜学校の生徒達を対象に書かれたということで、神の教えをとりわけ明確に、具体的に伝える必要があったと思われる。ライト教授は著書『ギヤスケル夫人再評価の根拠』*Mrs. Gaskell : The Basis of Reassessment*の中で、ギヤスケル夫人とキリスト教について次のように述べている。すなわち、19世紀当時のマンチェスターではユニタリオン派は少数ながらも社会

的、文化的に指導的立場にあり、ギヤスケル夫人自身宗教心に欠けていたり、うわべだけの宗教心を抱いている人々に、積極的に宗教を取り入れることを願って著作に向かうことがあったという¹⁰⁾。またホプキンス女史(A.P. Hopkins)によると、夫人は終生マンチェスターの学校・Lower Mosely Street Sunday and Day Schoolのよき教師であったばかりでなく、生徒達の生活や人生までにも多大な影響を与えたともいわれている。従って、*The Sunday School Penny Magazine*に掲載された兩作品が、彼女が抱いていた使命感と、雑誌の持つ性格とがあいまって必要以上に教訓的であり、教義的な傾向があったとしてもそれは当然な成り行きであった。

(iv)

では、宗教的な意図のみがこれ等の作品を支えているのであろうか。

フレッチャー夫人はトムに金銭という物質的な富を追い求める事を戒め、人を思い、人に親切であることこそ真の豊かさであると聖句を使って教える。

“Silver and gold have I none, but such as I have give I unto thee.”¹²⁾

(金、銀は私にはない。然し私にあるものをあげよう。 使徒行伝3.6.)

同時に、フレッチャー夫人は自分の行為、とりわけ他人に親切にした行為を誇示しようとする「人間のおごり」を戒める事も忘れては居ない。

“Let not thy left hand know what thy right hand does.”¹³⁾

(あなたは施しをするときは右の手のすることを左の手に知らせてはならない。 マタイ伝6.3.)

“Bessy’s Troubles at Home”でも人に尽くす事は相手の立場に立って思い、優しくある事だとベッシーの兄ジェムの口を通して伝える。

“Bessy, you wanted to make us happy your way as you liked ;
just as you are wanting now to nurse Mary in your way, and as
you like.

Now, as far as I can make out, those folks who make home happiest

are people who try and find out how others think they could be happy, and then, if it's not wrong, help them on with their wishes as far as they can."¹⁴⁾

(「ベッシー、きみはきみのやり方できみの好きなように、僕達を満足させようとした。それは今、きみがきみの好きなように、きみのやり方でメアリーを看病したがつているようにね。今僕が分かっているのは、家を気持ち良く出来る人とは、どのように他の人が幸せになれるかを考え、そうしようとする人だよ。それが間違いでないとしたら、その人達の望みを出来るだけ取り入れてあげて、手伝う事だよ)」

そして、火傷の痛みの中からメアリーはベッシーを責めるどころか彼女の立場を思いやる。

"I don't think it was anybody's fault, Jem," said she softly. "It was very heavy to lift."

"... I was not cross, was I? Please forgive me, Bessy, if I was cross."¹⁵⁾

(「これは誰の落ち度でもないわ、ジェム」彼女は静かに言った。「とっても重かったの。」

「私、機嫌が悪くないわよね、ベッシー、もしも、機嫌が悪くても許してね。)」

メアリーの謙虚で、相手を思いやり、過ちを許す心こそ真の意味での「人間の善意と深い愛情」に他ならない。フレッチャー夫人がトムの心に植えた愛情の種は、年こそベッシーとはそう離れていないが、機敏性や活力に欠けているメアリーの中にしっかりと根をおろしたのである。相手を許すという人間の善意、これは、キリスト者のみならず、いかなる宗教を信ずるものにも、そして信じていないものにも男女を問わず、いかに時代を離れていようとも、永遠に不変の真理にほかならない。山脇教授がギヤスケル夫人の文学は、すべて単純とも見られる人間の善意の上に打ち立てられていると述べるように¹⁶⁾、両作品が初期の段階の、教会紙という特殊な性格を持ちながらも、ギヤスケル夫人が求めた人間の善意というテーマがしっかりと描き出されていることは注目に値する。

(v)

加えて、何よりもここに登場する子供達は、何と生き生きしていることか。叔父の家に初めて連れてこられたトムに対して、従兄弟のジャックは彼らの最大の味方である母親の陰からしかめっ面をしたり、グラスからお茶を飲むしぐさをしたりして新参者の、とりわけ母親を亡くしたばかりのトムに対して、母に守られている自分達の優位さを誇示する。また、トムが窓格子を誤って壊したとき、自分達がいつもされるように叱られるであろうトムに同情する反面、事の成り行きを面白がるというジャックとディック兄弟の子供特有な優しさと、残酷さとを兼ね備えている彼らの心理をギヤスケル夫人は鋭く観察し表現している。そして、ベッシーの彼女なりに相手を思いやるのだが、若さという無鉄砲な衣をまとった一人よがりな生き方の様子、一方、ベッシーとは対照的に無欲で、善意に溢れ、自分に課せられた義務を賢明に果たそうとするメアリーの姿、よちよち歩きのジュニーのけなげさなどがリアルに描かれ読者の共感を呼び起こす。それは、ベッシーを含め登場人物一人一人に寄せるギヤスケル夫人の子供達に寄せる暖かなまなざしと、鋭い観察の眼とが注がれた結果である。

(vi)

ギヤスケル夫人の子供達に寄せる暖かなまなざしは取りも直さず母親のものである。ギヤスケル夫人が作家としてはもちろんのこと、家庭夫人として、母としても幸せな日々を送ったことは周知の事実である。イギリス文学界は、ジェーン・オースティンを始めとして、ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、バージニア・ウルフと次々に傑出した女流作家を世に送り出した。しかし、彼女達とギヤスケル夫人との最大の相違点はギヤスケル夫人が四人の子供の母だったことにある。その母親としての体験が作品に投影されないはずはなく、幼子や少年、少女、娘を描く際により真実味をもって描きだした。そして、母親の子供に寄せる限りない愛情が作品に一層の膨らみと暖かみとを与えている。

フレッチャー夫人がトムに人としてあるべき道を説く時のちょっとしたしぐさに、

〔“She put her arm gently around his waist, and drew him fondly toward her.”¹⁷⁾

(彼女は優しく胸に腕をまわし、愛情込めて彼を自分のほうに引き寄せ

た。)]

そして、トムが野原への散歩を誘った時の断り方に、トムを慈しむ母親の愛情が感じられる。一方、リー夫人も子供を思う心はフレッチャー夫人に劣るものではない。彼女が常に心掛けた事は家庭の快さにある。家庭がきちんと、心地よく楽しいものであれば様々な誘惑から息子や娘達を守れると信ずる母親の姿をここに見いだす。この思いが治療院行きを溜めらわせ、自分の不在中の様々な心配をさせるのである。

この様に、両作品に現れる母の姿は、聡明であろうとなかろうと、豊かであろうと貧しかろうと、母親として己を捨て、限り無く深い愛情を子供達に降り注ぐ母そのものである。

母親の愛、とりわけ子供に寄せる愛は、相手を許し、何等見返りを求めない永遠に与え続ける無償の愛でもある。母の愛に通じる無償の愛・人を許し、慈しむ愛こそ、フレッチャー夫人がトムに伝えたものであり、この愛が孤独の底にあったトムを再び生き返らせたのである。そして、自己本位なベッシーを正したのもメアリーの報酬や見返りを求めずひたすら相手を許す無償の愛だった。

ギヤスケル夫人はこの愛こそが、人間の持つさまざまな醜さ、争いや溝、そして悲しみや怒りをも消し去ることが出来ると信じたのである。この精神こそ、とりもなおさずギヤスケル夫人の信ずるものであり、彼女の作品の永遠のテーマといえよう。

産業革命の真ただ中、従来の価値観が崩れ、物質万能、貧しいものは一層貧しく、豊かなものは一層豊かになった時代、その時代を、そしてこれからの時代を生きる少年・少女達にこれら二つの作品を通してギヤスケル夫人は無償の愛の存在を伝えたかったのである。両作品は、日曜学校の生徒達へのメッセージとしての小さなものにもかかわらず、ギヤスケル夫人の思想が明確に伝えられているものとして高く評価されて良い作品である。

最後に、ワード教授 (W.A. Ward) が両作品を次のように評価していることも付け加えておこう。

「家庭的なマンチェスター生活のスケッチ、“Bessy’s Troubles at Home”と“Hand and Heart”は利己的でないということの素晴らしい教訓を効果的に強調している。年長の読者にとって、これらの作品の魅力、とりわけ *Hand and Heart* の魅力は登場人物の自然な敬けんさ (natural piety) のなかにある。

18)]

(注)

- 1) J. G. Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention*, (Linden Press, Fontwell, Sussex, 1970) p.83
- 2) Edgar. Wright, *Mrs. Gaskell : The Basis for Reassessment*, (Oxford University Press, 1965.) p.54
- 3) *ibid.* p.55
- 4) *The Works of Mrs. Gaskell.* vol.3 Knutsford Edition, (AMS Press, New York 1972.) p.536
- 5) Works, op, cit. p.537
- 6) Elizabeth C. Gaskell : *The Half Brothers & Bessy's Troubles at Home*, Edited with Notes by Yuriko Yamawaki. (The Hokuseidou Press, Tokyo. 1981,) p.61-62
- 7) Elizabeth Gaskell : *Four Short Stories*, Introduced by Anna Walters (Pandra Press, London 1983,) p.44
- 8,9) *Bessy's Troubles at Home*, op. cit, 27
- 10) Wright, op. cit, p.29
- 11) A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell : Her Life and Work*, (Octagon Books, New York, 1971.) p.302
- 12) Works, op. cit, p.539
- 13) *Ibid.*, p.546
- 14) *Bessy's Troubles at Home*, op. cit., p.57
- 15) *Ibid.*, p.54
- 16) 山脇百合子「エリザベス・ギヤスケル研究」北星堂, 1976
- 17) Works, op. cit., p.546
- 18) *Ibid.*, p.xxxi-xxxii